Yu Isogawa

五十川 祐 Yu Isogawa

東京都出身

2022 東京芸術大学大学院美術研究科修士課程美術専攻油画 修了
2019-2021
ウィーン応用芸術大学 サイトスペシフィックアートに交換留学生として在籍
2018 多摩美術大学油画科 卒業

・Exhibitions

2022
" 令和 3 年度 東京藝術大学 卒業・修了作品展　大学院美術研究科修士課程 / 東京芸術大学絵画棟 7 階 , 東京
" far longer " / アキバタマビ 21, 東京

2021
" ゆうれいたちのソウマトウ - Phantom / Phantasmagoria"/ 東京藝術大学大学美術館陳列館 1 階 , 2 階 , 正木記念館 2 階

2020
" Transit #6-8 "/Paulusplatz 5, 1030 Vienna, Austria
" Mountains painted by Cats "/Glockengasse 6, Wien, Austria
" Transit #10 Invitational "/Paulusplatz 5, 1030 Vienna, Austria

2018
" Japanese Emerging Artists'Exhibition in NY. JART8th " /WILLIAMSBURG ART & HISTORICAL CENTER, ブルックリン , アメリカ
" アタミアート ウィーク 2018" / ボーリング場 " スターレーン ", 熱海 , 静岡
" -1 " Group show by Master's first grader in the second laboratory / 東京芸術大学 Yuga Gallery, 東京
" Third Person Shooters / Auto Aim " / 東京芸術大学 大学ホール , 東京
" アートイン湯宿 2018 ", みなかみ , 群馬

2017
" Tokyo Wonder Seed 2017 " / トーキョーワンダーサイト , 東京

2016
" Performance 床 " performance event /studio DUST BUNNY, 東京
" 氷にまくらを入れて眠る " performance event /studio DUST BUNNY, 東京
" 窓の上の山 " performance event / 新宿眼科画廊 , 東京

2015
" 五美術大学交流展示 " / 武蔵野美術大学 , 東京

Rehabilitation

令和３年度 東京藝術大学 卒業・修了作品展　記録

Rehabilitation

2022
ビデオインスタレーション

リハビリテーション（Rehabilitation）の語源は「再び」を意味する接頭辞「Re-」に「適切な」を意味するラテン語「habilis」が合わさった言葉であり、「再び適したものになる」「再び人間らしく生きる」という意味になる。「適すること」「人間らしい」という言葉の対象には「社会」や「外の環境」が潜んでいるように感じられた。
人間らしさや人間の適した状態とは果たしてどんなものなのだろうか。

このビデオには２つの構造がある。１つは祖父が主体となりパズルを組み上げるものと、もう１つは作家が主体となりパズルに取り組むもの。

記憶が曖昧になり、辻褄が合わない受け答え、同じ内容の話を何度も繰り返すようになった祖父は、日々脳トレと称するリハビリテーションを繰り返し行い、“この場に留まる”ことができるように努めている。リハビリテーションの本来の“元の状態へ戻る”という目的とは別の地点へと向かう行為が、コロナ禍を生きる私たちの「家」というものについて改めて考える機会を与えているであろう。
家は安全な場所であり私たちを安心させ、最もプライベートな事物たちで私たちの身体を保護するが、同時に社会からの隔離を助長する。家にいることで、少しずつ身体の中で何が消失していく感覚は、誰しも経験があるのではないだろうか。それらを取り戻すためにはどうすればいいのか？しかし、消失していくことで獲得することもある。この場所に留まることで、何かを生み出すことについて思考しながら、祖父とバラバラになったパズルを完成させ、またバラバラにするを繰り返していく。

「Transit #6 (2020)」より 撮影： Tsai Ju Wu

展示風景「Transit #6 (2020)」より 撮影者：Tsai Ju Wu

Stratum

2016-
木材に UV プリント

落ちていた角材を拾って眺めていたら、木目が海に見えたことをきっかけに制作を始める。
2018 年 10 月に群馬県みなかみ町湯宿温泉街の地域住民に「海の写真が欲しい」という旨を書いた回覧板をまわさせてもらったり、直接お声がけして作品の説明をし、海の写真を集めることを試みた。海が好きで海が写っている広告まで手元に置いているという方に出会うことができたり、家族のアルバムから何気なく撮影されたであろう海の写真を直接いただくことができた。その時いただいた写真を、作家は自身が拾って得た角材に UV プリンターを利用して印刷を施した作品群である。
この試みは、人間の記憶から海を探すことにある。私たちの身体は、たとえ海から離れた場所にいても、私たちのすぐ近くに存在するということに気づく機会を得ることができる。

展示風景「far longer (2022)」撮影：冨田了平

「far longer (2022)」より 撮影：冨田了平

「far longer (2022)」より 撮影：冨田了平

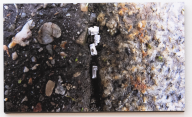
「Transit #6 (2020)」より 撮影 : Tsai Ju Wu

「Transit #6（2020）」より 撮影：Tsai Ju Wu

Letters in a gap

「far longer」より《AIPOTU》 撮影者：冨田了平

「far longer」より《TSET A TEG》 撮影者：冨田了平



「far longer」より《 EREH THGUAT SI EGAUGNAL TAHW 》撮影者：富田了平

《 DNUOS 》

Letters in a gap

2021
シリコン
写真作品の場合はサイズ可変

この作品は、現在もウィーンのいくつかの場所で展示されている。
3mm ほどの大きさの文字スタンプを道路の狭い隙間やひび割れに設置。それらは文字が上を向くように置かれ、文字や構成された文章はスタンプであるため鏡文字になっている。鑑賞者は、地図を見ながら通りの名前を見つけるように、通常よりもゆっくりとした足取りで、足元を見ながら文字を探すことを余儀なくされる。

展覧会「far longer」では写真作品として展示。接写で撮影された記録写真を本来の文字サイズよりも拡大させ、インクジェットプリントで印刷した作品群を発表。

プレゼンテーションでの様子

「ゆうれいたちのソウマトウ(2021)」より 撮影：しばたみづき

展示風景「ゆうれいたちのソウマトウ(2021)」より 撮影：しばたみづき

大きいスタンプ

2021
H17×W41×D104(cm)
木材、ゴム板、鎖

東京芸術大学構内に建つ、陳列館という建物の外装にスクラッチタイルが利用されていたことから着想を得て制作。
駅前に設置されているスタンプラリーとその姿を重ねることができるが、その大きさからスタンプの持つ特徴の手軽さは排除され、オブジェクトとしての存在感を獲得している。
言葉の意味は直訳で「あなたを引っ掻く」と読むことができ、威嚇するような文言であるが、実際のスタンプは鎖で建築物と直接繋がれており、移動範囲は限られている。

dig_level

展示風景「Third Person Shooters / Auto Aim (2018)」より

dig_level

2018
パフォーマンスビデオ 7 分
協力：宮内いずみ
撮影：斉藤公太郎

私は過去 6 ヶ月間さまざまな場所に行きましたが、私は浜辺を歩き海を眺めたことがよく思い出されます。私は地面と海が結合して地平線を保っている状況に魅了された。
身体と自然、人工と自然、過去と現在の関係に基づいて、既存のものと新しいものの間の距離を狭めることを試みるパフォーマンスを制作。
身体を新しい資源として捉え、地面を掘って手で水平にし、地面と体の高さを均一にしていく。

あるための支え

撮影：小坂透

あるための支え

2017
パフォーマンスビデオ 12 分
パフォーマー：Shuji Inoue, Yukihiro Noguchi, Hiroki Katayama, Momoe Kanada, Takumi Gotanda, Huang jieru, Abby Chou, Hikaru Nishida, Lee Seung Seub, Xiaoyong Wang
素材：モルタルにアクリル絵の具、脚立

10 人のパフォーマーが絵画のある空間に入場していく。そして壁から絵画を外し、壁の代わりに絵画を支える役目を全うする。支えている間は壁のように動かないことを強いられている。
次に 1 人のパフォーマーが入ってくる。彼女は絵画を壁に掛けていた時と同じ高さに調整したり、傾いた絵画を直そうとする。

絵画は壁であり、壁に掛けられているという作家の認識から、人々に壁になるという役割を与えた。壁の存在は人間の行動に大きく作用する。壁が人間を動かしてきた歴史を背景に、人が壁になりきることで、他の事物に動きをもたらす。

「アタミアートウィーク(2021)」より 撮影：齊藤公太郎

Display

2018
パフォーマンスビデオ 6 分 41 秒
会場：ボーリング場 スターレーン
パフォーマー：中村かよ
　　清水恵美
　　髙橋莉子
撮影：齊藤公太郎

2018 年 3 月 23 日に熱海にある廃ボーリング場の窓を使用し、室内から屋外へパフォーマンスを試みました。
パフォーマーは窓の前に立ち、初めはあらかじめ指示された行為を実行する。外の景色を眺める、外を歩く歩行者を眺める、座る姿を見せる、カーテンを揺らすなど簡単な行為から始まり、次第にパフォーマーの各々のパフォーマンスに委ねていった。アートウィーク会期中に 3 日間かけて 15 分のパフォーマンスを 4 回実演した。

私がパフォーマンスに選んだ会場は、駅のすぐそばにありながらも、ボーリングの運営が終了し、それでも取り壊されることもなく街のど真ん中に佇んでいた。誰もそこへ目を向けなかった。中身のない建物には本当になにも存在しないのか。私はなにもないと言われている場所のその内側から外へ向けて信号のようなものを発信する。

熱海アートウィーク 2018 で行ったパフォーマンスの記録である。熱海は静岡の観光地で、古くからある温泉街として知られている。観光地でありながら、熱海には使用されなくなってそのままになった古い廃屋と空家がたくさん残っており、それらを何か別のものに活用するために熱海アートウィークという展覧会が生まれたという。日本の美術大学の学生によって企画運営されており、アーティストとして招待され参加した。

Window

Window

2017
インスタレーション
H35cm×W130cm×D5cm
H35cm×W130cm×D5cm
木材、コンクリート

コンクリートに透過性を持たせるために制作した作品。

身長より高い位置に置かれているそれは、必然と見上げることを強要する。
夜道を歩いていると、無意識に家や窓、月を眺めてしまうように。
窓に見えるその規格には、コンクリートが埋め込まれている。